柏艪丸航海日誌

〈vol.14〉
2017年春号

【発行】注文・問い合わせ先
柏艪舎（はくろしゃ）
札幌市中央区北２条西３丁目１
電話　011-219-1211
FAX　011-219-1210
HP　www.hakurosya.com

無　料

編集秘話 ── 事実は小説より奇なり？！

編集者だからこそ書ける、新刊・おすすめ本にまつわるエピソードをお届けします。

北都の七つ星

木村花道

2017年3月刊 /1,500円（税別）

『北都の七つ星』は、平均年齢六一歳の男達が、亡くなった親友のために奮闘する友情物語。あつい友情で様々な障害を乗り越える様が臨場感溢れるタッチで描かれたこの作品は、体を自由に動かせない寝たきりの人間によって書かれたものだ。

札幌で広告代理店を営んでいた著者の木村花道（俊嗣）氏は、二〇一二年に脳幹梗塞で倒れ、その後、指先がほんの少し動くまで回復したものの、今も完全寝たきりの状態のままだ。人工呼吸器が外れた現在、声は取り戻しつつあるが、自分では頭の角度を変えることすら困難だ。反対に意識ははっきりとしている。この状況がどれほど苦痛を伴うものか想像に難くない。

本作は、木村氏が病に倒れる前に書きためていた作品のうちの一つで、生前、親交のあった北海道の人気歌手・中坪謙氏（享年五二歳）との実話がベースになっている。出版に際しての小説の加筆修正は、編集者が病院へ行き原稿を読み上げ、木村氏がその場で加筆部分を口述し、修正箇所を指摘する「口述筆記」で行なった。作業は長期に及んだが、木村氏からは一度も弱音を聞いたことがない。

常に前向きで、人を笑わせることが好きな木村氏の病室にいると、どちらがベッドに寝ている人間なのかわからなくなる。彼の中にある凄まじい程の精神力と忍耐力には脱帽するばかりだった。

「読んだ後に、あたたかい気持ちになるような、そんな幸せな小説を書いていきたい」そう語る木村氏は、今日も、誰かを元気づけたいと新たな小説を書き続けている。（編集担当　白幡和美）

完成した本を見て笑顔を見せる木村花道さん。病室には、木村さんのジョークと見舞客の笑い声が絶えない。

私の中の三島由紀夫

山本光伸

2017年3月刊 /1,500円（税別）

お気づきの方もいらっしゃるだろうが、本書は弊社の代表である山本光伸の作品だ。

山本はもともと英米文学の翻訳家である。ロバート・ラドラムをはじめ、二〇〇作品以上の翻訳を手がけてきた。東京の翻訳学校でも教鞭をとっていたが、北海道に惚れ込み五三歳で札幌に居を移し、東北以北唯一の文芸翻訳家養成校「インターカレッジ札幌」を創設した。

しかし、せっかく札幌で翻訳家を育てても東京に行かなくては仕事がない。そこで、仕事の受け皿を作るべく、十六年前に「柏艪舎」を創設した。

いままで弊社より刊行してきた山本の作品は翻訳書や、翻訳に関するものが主だった。山本がかつて楯の会と関係を持っていたことはみな知っていたが、今回なぜ、三島由紀夫について書いたのか？

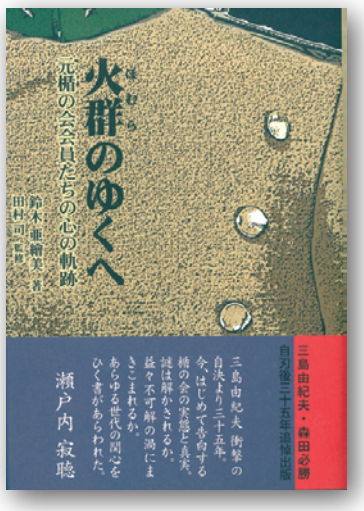
山本には旧知の非常に霊感の強い女性がいる。その方と会食をしているときに突然、「あなたにしか書けない三島由紀夫像があるはずだ。それを書きなさい」と言われたのだ。はじめはずいぶん渋っていたが、書き始めるとまるで憑かれたように、一ヶ月ほどで一気に書き上げてしまった。自分でもどうしてこんなに書けたのか不思議だと言っているほどだ。

そして、書き上げたいま「これは自分の遺書のようだ」と言っている。ずっと近くで見てきた私たち社員も、本書を読んで初めて知ることが多かった。

本書の刊行に合わせて、山本は多磨霊園に出向き、三島由紀夫氏の墓前に本書を捧げてきた。その前に、同じ読みの「東京多摩霊園」に間違えて行ってしまった、というのはここだけの話。国際基督教大学出身のため、学生時代によく近所の多磨霊園に散歩に行っていたそうだが……。

本書には、今回執筆していく中で山本が発見した三島由紀夫の最期についての新説や、嫌っていたと言われている太宰治との共通点、野上透氏が撮影した未発表の三島由紀夫の写真も収録されている。三島由紀夫が楯の会会員たちに出した自決当日の例会案内のハガキの写真も収録。ぜひ、お手に取ってご覧いただきたい。（編集担当　可知佳恵）

ご自由にお取りください



火群のゆくへ

元楯の会会員たちの心の軌跡

鈴木亜繪美 著・田村司 監修

2005年11月刊 /1,700円（税別）

本書は三島由紀夫が晩年率いた「楯の会」隊員たちのその後を取材したドキュメンタリーだ。刊行後十二年経つが、楯の会の隊員たちをここまで取材した本は他に出ていないだろう。

本書は三島由紀夫、森田必勝自刃後三十五年目に刊行された。隊員たちはそれまで、自ら執筆することはあっても、取材はほとんど受けてこなかった。名だたる作家たちから幾度も取材依頼があったそうだが断っていたという。

それをここまで克明に、広く取材できたのは、本書の著者鈴木亜繪美氏の人間的魅力によるものが大きいだろう。元隊員一人一人を訪ね歩き、取材には十年の月日を費やしたという。

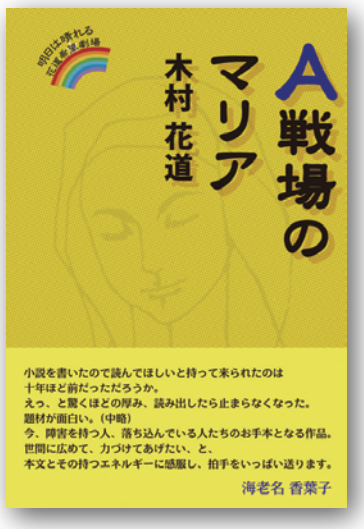
はじめは「三島・森田事務所」からの依頼で取材を始めたものの、思うように話を聞けず途中で行き詰まっていたそうだ。

そんな時、弊社代表の山本が、元楯の会隊員の従兄弟、田村司氏に「元楯の会隊員たちが事件後どのように生きてきたのか本にしたい」と相談をした。そこで、田村氏が元隊員たちに連絡を取り、再び鈴木氏の取材がスタートしたのだ。

取材を続ける中、田村氏も鈴木氏も次々と病気で倒れてしまった。「死を覚悟した者にしか書けない」というメッセージだったのかもしれない、と鈴木氏は振り返る。

本書を担当して感じたことは、もし自分が二十代前半で三島由紀夫のような天才と出会っていたら、その後の歳月に耐えられただろうか、ということ。

「三島由紀夫が投げた小石の波紋は今もなお広がり続けている」という人がいる。本書を担当することで、私もその波紋に飲み込まれたようだ。以来ずっと、「三島はともあれ、森田の精神を後世に向かって恢弘せよ」とはどういうことなのか、と考えさせられている。（編集担当　可知佳恵）



A戦場のマリア

木村花道

2014年11月刊 /1,600円（税別）

A（アドバタイジング）という過酷な業界を鮮烈に駆け抜ける沢村陽平。心身をすり減らした陽平はある時、空蝉の聖母と巡り会う……。闘病中の著者による、希望溢れる第一級のエンタテインメント！　本書がデビュー作。

文士一瞬

野上透写真集

野上透

2006年1月刊 /3,500円（税別）

写真家・野上透が捉えた文士たちの知られざる表情。三島由紀夫が教習所で脱輪している写真も…。『私の中の三島由紀夫』には、本書に収められなかった本邦初公開写真を収録しています。

鋭意！ わっしょい倶楽部会員募集中！

「わっしょい倶楽部」は柏艪舎を育ててくださる皆様のサポート組織です。北の地、札幌から私たちと一緒に新しい出版文化を創造しませんか？
会員（会費無料）の皆様には「柏艪丸航海日誌」やイベント情報をお届けいたします。会員特典もございます。入会ご希望の方は、住所、氏名、ご連絡先を明記のうえ、弊社までお申し込みください。